




	書名	著者名	請求記号
1	最後の医者は雨上がりの空に君を願う 上・下	二宮敦人著	913.6/Ni/1 ～2
2	トップナイフ	林宏司著	913.6/Ha
3	崩れる脳を抱きしめて	知念実希人著	913.6/Ch
4	いのちの停車場	南杏子著	913.6/Mi
5	がん消滅の罟:暗殺腫瘍の謎	岩木一麻著	913.6/Iw
6	殺人者の白い檻	長岡弘著	913.6/Na
7	病は気から、死は薬から:薬剤師・毒島花織の名推理	塔山郁著	913.6/To
8	ホット・ゾーン:「エボラ出血熱」制圧に命を懸けた人々	リチャード・プレストン著、高見浩訳	493.8/Pr
9	チーム・バチスタの栄光 上・下	海堂尊著	913.6/617/ 1～2
10	孤独な子ドクター	月村易人著	913.6/Ts
11	希望のステージ	南杏子著	913.6/Mi
12	臨床の砦	夏川草介著	913.6/Na
13	泣くな研修医	中山祐次郎著	913.6/Na
14	歯科女探偵	七尾与史著	913.6/Na
15	アウシュヴィッツの歯科医	ベンジャミン・ジェイコブス 著、向井和美訳	936/Ja
16	夜と霧	ヴィクトール・E.フランクフル 著、霜山徳爾訳	946/Fr

**最後の医者は**  
雨上がりの空に  
君を願う 著 三宮敦人

「最後の医者は桜を見上げて君を想う」  
(日進・名公所蔵有)の続編で完結編

HIVに感染してしまった恋人同士の二人、  
病に立ち向かう彼女と、目を背け  
逃げる彼氏。対照的な二人のエピソードから話しは始まる。そして、  
「死を受け入れる医者」と、「生を諦めない医者」相反する二人と、  
それぞれ出会うことで、人生が大きく変わって行くことになる。

もしもの時、あなたは、  
どちらの医者に診てもらいたいと思いますか？




**トッポナイツ** 林 宏司: 著

「トッポナイツ」... 医師の中でも超一流の技術を持つ者にのみ、あたえられる最高の称号。

- ・脳外科医としての腕を磨くため、夫と娘を犠牲にしてきた深山。
- ・世界最峰の脳外科医で、結婚せず、酒と女性関係に奔放な黒岩。
- ・患者と距離を取り、幼少期のトラウマを抱えるも若くして天才と呼ばれる西群。
- ・幼い頃から頭脳明晰で、トッポの道を進んで来た新人の小机。

優秀な医師として、普通の人間として、それぞれの姿、どちらも魅力的に書かれています。

2020年ドラマ化された「トッポナイツ」の原作です！





## 崩れる脳を抱きしめて

著 知念実希人



広島から横浜の療養型病院へ、研修医としてやって来た主人公の「ウスイ」は、グリオブラストーマ(悪性脳腫瘍)を抱える「ユカリ」と出会う。外の世界に怯えるユカリと、あるトラウマを抱えたウスイ。2人は次第に心を通わせていくが...

本書で一番印象的だったのが、ホスピスを兼ねている院内で、「DNR(蘇生処置拒否)」を希望する患者を、ウスイが看取るシーン。とても考えさせられるものがある。



終末・緩和医療、家族愛、恋愛、ミステリーなど、様々なテーマが詰まった作品です!

## いのちの停車場



東京の救命救急センターからとある事情で金沢に戻った主人公。故郷の地で訪問診療医として働くことになるが...

訪問診療で出会う患者や主人公の父を通して見えてくる問題。家や家族から離れて、病院で最期まで治療を続けることが理想なのか? 苦しくても痛くても生き長らえることが患者にとって良いことなのか? たとえその先に回復の見込みがない状態で生き続けることが幸せと言えるのか? 理想の最期とは一体どこにあるのか? 終わらない苦しみ、痛み、安楽死。主人公を通して、色々と考えさせられます。







## 暗殺腫瘍の謎

岩不 - 麻・著

×ラノーマ

医師の夏目は友人から持ち込まれた「悪性黒色腫」発症に伴い保険金詐欺情報と、外来患者が患う「無色素性悪性黒色腫」に強い不審を抱く。

同じ頃、他県で発生した医師連続殺人事件の被疑者にかつての恩師の名が挙がっていることを知り……。「がん」の発生から抑制までを人為的に操ろうとする強い悪意に巻き込まれていく夏目に突きつけられる代替医療の闇。

がん治療に焦点をあてた小説が描くのは、すでにありえる現実なのかもしれない。



回復すれば刑が執行されると知りながらリハビリに励む死刑囚に被害者遺族ではなく主治医として向き合う敦也は医師としての矜持を取り戻すのか？  
そして事件の真実とは、

優秀な脳外科医でありながら医師の任事に価値を見出さなくなつた尾不敦也は救急搬送されてきた囚人が、六年前に両親を殺害した犯人であることを知る。しかも相手は判決後も一貫して無実を訴えていた……

## 殺人者の白い檻

長岡弘樹・著





## 病は気から、死は薬から

塔山 郁 著

ホテルマン・水尾爽太の身の回りで起る

トラブルを専門知識と経験を元に解決する

薬剤師2人の活躍を描くミステリ(?)

サプリメントや健康補助食品にまつわる

マルチ商法の罠、死に至る毒にもなる

草花だけと育っている女の秘密……。読むだけで

知識も増える、一石二鳥の小説です。



## THE HOT ZONE

「エボラ出血熱」制御に  
命を懸けた人々

すごい本だ...! ストレンジャー・シングスやゲーム・オブ・スローンズなどの海外ドラマにハマったことのある人なら読んでわかるはず。恐ろしくても次のエピソードにのめり込んだドラマのように、構成が見事で、忍び寄る恐ろしいもののカットの挿入に、先の展開に怯え、手に汗を握りながら頁を捲るばかり。『エボラに魅せられた』リチャード・ブレ斯顿の取材の賜物である。

ましてや、先のドラマと違ってこの物語は実話なのだ。感染症の恐怖(病気そのものも、ちょっとした油断も、周りの影響も)がすっかり日常となった今読むと、臨場感がすさまじいものである。

そして改めて、最前線に立つ者たちの勇氣に、「勇者」とはこの人たちにこそ心が震える。つくられた物語ではなく、この世界を救うことに奮闘したヒーローたちの物語。





# チーム・バチスタの栄光 上下

海堂 尊 著

舞台は大学病院。心臓移植の代替手術バチスタ手術専門の天才外科チームが「チーム・バチスタ」。手術の成功率は100%だったが、3例連続術中死が起こり、内部調査が始まり、徐々に解き明かされていきます。医師である海堂尊のデビュー作で、「このミステリーがすごい! 大賞」の第4回大賞



作品。映画化もされている。



## 孤独な子ドクター 月村 易人 著

著者は現役の消化器外科医。実体験が活かされているため、この本は外科医療の現場の様子やそこで働く人々の思いがとてわかりやすく描かれています。主人公は三年目の医師。「研修医として二年間の初期研修を終え、「手術が好き」という理由で外科を選んだ、「専攻医」として大きな病院に赴任します。初めての現場で奮闘しますが、思うようにはいかず、悩みや孤独を抱えるように……。そんな主人公の心の動きや周りの先輩、同期、後輩、患者さんの思いがリアルに伝わってきます。さりげなくはさまれる両親とのやりとりも心にしみ、色々な人の思いからも主人公の人物が感じられます。読後に前向きな気持ちになれる青春小説。





## 希望のステージ 南 杏子 著



ステージに立つことを目指している人を支える医師の物語を集めている。人は最期をどう迎えるか、高齢化社会が進み、人間の尊厳についても考えさせられる昨今であるが、私は、ある医師と周囲の人間との物語の中に、大きなテーマが隠れていると思いながら読んだ。「人生とは」「人が生きていくということとは」この本を読んで考えてみるのもいい。



## 臨床の砦 夏川 草介 著

夏川 草介 著

この話は、2021年冬、緊急事態宣言が発令されていた頃の長野県の病院が舞台となっています。インフィクシオンですが、医師である著者が新型コロナウイルス患者の対応をしている現場について綴っており、実際の現場に近い話であると想像できます。

医療現場で働く人も人間であり、家族がいます。人を救うために追われながら対応している苦悩が描かれています。私たちはたくさんの人に支えられて日々過ごしているのだと考えるさせられます。





# 泣くな研修医

患者側から見れば、研修医、ベテラン医師の区別はない。研修医1年目の主人公が、患者さんにうまく対応できず一人きりで涙をこぼす姿に、バカ”締め付けられる。社会人1年目は、学生時代と生活が変わって、大変な事の連続である。主人公の経験に励まされると思うので、是非読んでほしい。



# 歯科探偵


表参道ヒルズにあるスタッフ全員が女性の歯科医院で起きる事件が、症例A・症例B・症例Cと3つの短編になっています。歯科医・衛生士・技士・受付の歯科女達が事件に挑みます。

アルジネート・印象・シンマ・キシロカインスプレー・覆髄剤・ペル等、所々に歯科用語が出てきて面白いです。

衛生士・<sup>あやめ</sup>彩女ちゃんの恋の行方も気になります。









## アウシュヴィッツの 歯科医

THE DENTIST OF AUSCHWITZ A MEMOIR  
ベンジャミン・ジエイコフス

ポーランドの小さな村で、歯科医の勉強をしていた著者は、ユダヤ人である。ナチスの強制収容所へと送られます。過酷な日々の中、仲間たちは、次から次へと死に追いやられ、父も殺されてしまいます。著者は、歯科医としての手技で、仕事や食糧を密通してもらったり、小さな、しかし奇跡的な選択の連続により、生き残ります。

残酷な表現は少ないで、淡々と読み進められる良書ですが、やはり、こんな出来事が現実にあった...と知るととても辛くなります。

『芸は身と助く』が感じられる1冊です。

## 「夜と霧」 ドイツ強制収容所の体験記録


V.E. フランク

これは「強制収容所における、一心理学者の体験」(原題)である。

1933年ドイツはヒトラーによる緊急命令以後、ゲシュタポ(秘密国家警察)に、「党と国家の敵はすべて取り除く」という任務が課せられた。

アウシュヴィッツをはじめ収容所に幾百万人という人間が占領地区から送られ、「ユダヤ人だから」、「労働に適さないから」といった理由で殺害されていた。

この本は、ユダヤ人としてアウシュヴィッツに囚われ、生きた心理学者フランクの著である。心理学者の冷静な目で、人間の尊厳が失われていく生々しい表現がずっと。これだけの出来事を冷静に記録しておける、彼の勇気は素晴らしい。







## MEMO







## MEMO







愛知学院大学  
歯学・薬学図書館情報センター

コンセプトコーナー 2022年12月～2023年 1月  
小説で知る医療現場の希望と葛藤

